ハンス・クリスチャン・アンデルセン
矢崎源九郎訳

はだかの王さま（31）

「おそれながら、陛下には、お着物をおぬぎくださいますよう」と、うそつきどもは言いました。「わたくしどもが、この大鏡の前で、あたらしいお着物をお着せ申しあげます」

　皇帝が着物をすっかりぬぎますと、うそつきどもは、できあがったことになっている、あたらしい着物を、一枚一枚着せるような

ハンス・クリスチャン・アンデルセン
矢崎源九郎訳

はだかの王さま（32）

ふりをしました。それから、腰のあたりに手をまわして、なにかを結ぶような手つきをしました。つまり、それは、もすそというわけだったのです。皇帝は、鏡の前で、ふりむいてみたり、からだをねじまげてみたりしました。

「ほんとうに、ごりっぱでございます！　まことに、よくお似合いでございます！」と、みんなが口

ハンス・クリスチャン・アンデルセン
矢崎源九郎訳

はだかの王さま（33）

々に申しました。

「がらといい、色合いといい、なんというけっこうなお着物でございましょう！」――

「みなのものが、お行列のさいに、おさしかけ申しあげる天がいを持ちまして、外でお待ちいたしております」と、式部長が申しあげました。

「よろしい、わしも用意ができた

ハンス・クリスチャン・アンデルセン
矢崎源九郎訳

はだかの王さま（34）

ぞ」と、皇帝は言いました。「どうだ、よく似合うかな？」

　それから、もう一度、鏡のほうをふりむきました。こうして、自分の着かざった姿を、よくながめているようなふりをしなければならなかったのです。

　もすそをささげる役目の侍従（じじゅう）たちは、両手を床のほうへのばして、もすそを取りあげるようなふりを

ハンス・クリスチャン・アンデルセン
矢崎源九郎訳

はだかの王さま（35）

しました。こうして、何かをささげているようなかっこうをしながら、歩きだしました。なんにも見えないということを、人に気づかれてはたいへんです。

　こうして、皇帝は行列をしたがえて、美しい天がいの下を歩いていきました。

つづく